古墳文化が花開くまで③

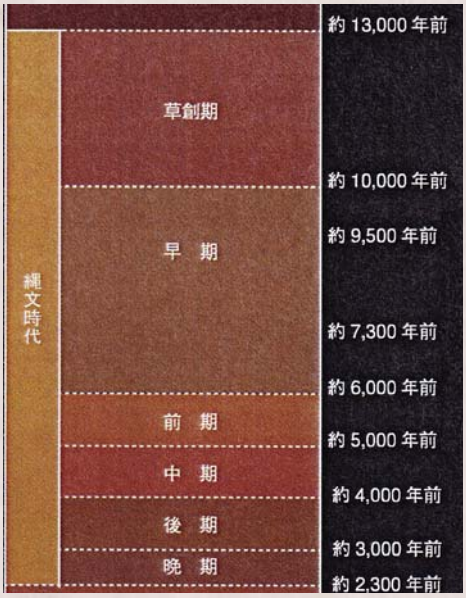
自然は時に私たちを絶望させるほどの災害をもたらす。しかし生命はその惨禍を超え、復興していくエネルギーを持っている。そのエネルギーは微小なものかもしれないが、確かに存在している。縄文早期に文化の最先端をいっていた南九州の地は、鬼界カルデラの噴火（約７３００年前）によって壊滅的な大打撃を受けたが、数百年後には植生の回復がみられた。それに伴って縄文人が再びこの地で生活を営むようになった。ただ、それまでのような先進的な文化ではなく、九州北部系統の土器が多くみられるなど各地の影響を受けるようになった。

この時期の縄文人は盛んに航海（木をくり抜いた丸木舟が用いられた）を行っていたようで、今の私たちが想像しないほど広域的な地域と交流している。土器には、作られた地域でそれぞれに特徴があることから、同じ種類の土器が発見された地域では人びとの交流があったと考えられ、また石器に用いられた石材の産地によっても交流を知ることができる。東九州自動車道の建設に伴い調査されている持留の『京の塚遺跡』では、近畿地方・瀬戸内地方などで作られたタイプの土器や、大分県姫島産・長崎県針尾産・佐賀県腰岳産の黒曜石を使った石器が出土していて、縄文前期末から中期にかけて他地域との情報・物流の拠点であった可能性を示している。

（資料提供）
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター

また豊かな恵みをもたらしながら、一方で災いをもたらす自然の中で生きた縄文人にとって、まつりや儀礼といった『祈り』は大切な役割を担っていた。現在、縄文人の祈りの姿を見ることはできない。しかし土偶・石棒などの特殊な石製品・土製品が縄文人の心＝精神文化を形として今に伝えている。野方の『天神段遺跡』で発見された縄文前期の石剣は、先端部や側面が鋭利に加工されていないことから、実用的な武器ではなく、儀式に用いられたものと推察されている。東日本で見られる石剣と類似していることから東日本との交流も考えられている。

縄文後期から晩期にかけては、土器の種類が多くなったり、さまざまなサイズの土器が作られたりと土器が変化を見せる。その背景には、食物の種類の増加という食糧事情の大きな変化があったといわれる。この時期のものとして、土を耕すために使う石製の土掘り具が大量に出土しているといったことから、畑でイモ類や穀物（アワ・ヒエ・イネなど）が作られていたのではないかと考えられている。水田農耕に先駆けた農耕文化が存在していたことになる。

私たちは歴史にふれる時、ある時代が終わり、新しい時代が始まるというその時代区分を、権力者の交代や政権の所在地の移動など社会への影響が大きい出来事によってとらえている。しかし縄文時代にかわる新たな時代‐そこには人間の生活の根っこを植えかえるような大変動があった。栽培するという新たな生業の芽生えであり、新しい時代が始まろうとしていた。（続く）

天神段遺跡出土『石剣』
（鹿児島県立埋蔵文化財センター所蔵）